

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：32615

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370108

研究課題名(和文) 琉球列島の音楽における「声意識」

研究課題名(英文) Voice Consciousness in the Music of the Ryukyu Archipelago

研究代表者

GILLAN Matthew (GILLAN, Matthew)

国際基督教大学・教養学部・上級准教授

研究者番号：50468550

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は琉球列島で伝承される音楽における「声意識」(voice consciousness)を考察し、音源、文献、又は演奏者とのインタビューを通して、その発声法の社会的な意味を明らかにすることを目的とした。3年間にわたって、琉球古典音楽、組踊り、沖縄や奄美諸島の民謡、ポピュラ音楽などの演奏者との調査を行い、声や発声法の理論や概念、伝承プロセス、または声で表現される社会的アイデンティティを考察した。研究成果として、7回の学会発表(招待講演2回)、論文を4本作成した。

研究成果の概要(英文)：This research project aimed to investigate the concept of 'voice consciousness' in the music of the Ryukyu islands in the south of Japan using recordings, written records and ethnographic fieldwork. Over the course of the 3-year project research was undertaken with informants and performers of Ryukyuan classical music, kumiodori, folk music (min'yo) of Okinawa and Amami, and Okinawan pop music. The project investigated the ways in which the voice was theorized, conceptualized and transmitted, as well as the ways in which performers used vocal technique as a way of negotiating cultural identities. The research results led to 7 conference presentations and 4 academic papers.

研究分野：民族音楽学、芸術学、Voice Studies

キーワード：声 琉球 沖縄 音楽学 身体 アイデンティティ ジェンダー 伝承

### 1. 研究開始当初の背景

近年の民族音楽学でも、歌う「声」や発声法を中心とした研究が多く見られる。これらの研究は、西洋音楽を分析する際に注目されがちな音階、旋律、和声などを越え、新しい分析方法の可能性を示してきている。例えば、Falesの論文「The Paradox of Timbre (2002年)」では、囁きを多く含むブルンジの音楽において、声の「音色」に注目し、声を理解するために音程や旋律以外の要素を考察する必要性を強調した。同様に Olwage (2004)は南アフリカの合唱隊に使われている声の音色を分析し、その声が社会において、階級、人種の「音声アイデンティティ」(sonic identity)の役割を果たしていることを指摘した。日本における他地域の伝統音楽も殆ど同様だが、琉球列島の音楽とは「声」中心の文化であり、発声法や声の音色についての言い伝えや理論が見られる。本研究では、琉球列島の音楽文化におけるこれらの声の概念を調査し、近年の民族音楽学の視点から論じることを目的とした。

### 2. 研究の目的

本研究は琉球列島で伝承される音楽における「声意識」(voice consciousness)を考察し、音源、文献、又は演奏者とのインタビューを通して、その発声法の社会的な意味を明らかにすることを目的とした。琉球古典音楽、民謡、祭祀歌謡、ポピュラー音楽を取り上げ、これらは琉球社会ではどのように論じられ、理解されているか、また歌う声は現代の琉球社会における日常会話や生活とどのような関係を持っているのか、という点を明らかにした。本研究は近年の他の地域を研究対象とした民族音楽学での声や発声の研究を展開し、日本国内の音楽分析研究に今までになかった新しい研究方法を発展させることをも目的とした。

### 3. 研究の方法

研究方法は次の四つのアプローチをとった。1)音源・資料収集：市販されている音源の購入に加え、沖縄県立芸術大学、琉球大学、または個人所蔵の歴史的な音源や資料を共有してもらい、これらの音源を分析した。2)演奏者・聴衆者とのインタビュー：本研究では数回にわたって沖縄、奄美、九州で現地調査を行い、演奏者の実演を録音・録画し、演奏法についてのインタビューを行った。研究成果ではこれらの音源・録画を分析し、インタビュー内容を文字起こしした上で声意識のディスコースを明らかにすることができた。3)参与観察：場合によって、演奏者にお稽古をしてもらい、発声法の教授法や発声法を取得するときの注意点などを考察した。4)音源などの分析：分析するためにパソコンや編集用のソフトを購入した。

### 4. 研究成果

研究成果は次の4点にまとめられる。

1) 古典音楽における吟法理論の研究。琉球宮廷に生まれ、現代に至って発展してきた琉球古典音楽(または歌三線)は、日本における殆どの伝統音楽と同様に声中心の文化で、発声法や声の技巧に関する「吟法」(ぎんぼう)といった理論や技術用語は譜面や歌三線の関する文献に多く見られる。本研究では、琉球古典音楽の発声法とそれを実現するための身体の動きとの相関関係を考察した。琉球古典音楽は、世界のあらゆる音楽と同様に、旋律やリズム以外の幾つかの声の技巧や発声法によって、その音楽が「琉球らしさ」を表現し、その声の技巧が琉球古典音楽の基本的な要素でもあると考えられる。1930年代に書かれた富原守清、世礼国男、比嘉掬水の文献で見られる吟法や、それに伴う身体の動きは、その「琉球らしさ」を正確に理論化することが一つの目的であったと考えられる。演奏法の変化、またこれらの文献の比喩的な書き方を筆頭に、これらの吟法理論にはまだ不明な点が多いが、ここでは、同時代に書かれた文献を参考しながら、20世紀前半の音源をソノグラム表示を通し、声の強弱や微妙な音高の動きと、世礼、富原などの文献内での発声法理論を理解するための新しいアプローチを試みた。

上吟・下吟に伴う頭・首・上半身の動きは何を目的とし、それらは発声法にどのように影響するのかを、本論文では次のように分析した。

A) 20世紀前半に執筆された文献における上半身を上下に動かす、という指摘の効果の一つは喉、喉頭などをコントロールすることであると推測できる。永言録でもこれらの動きは「喉を開く」、「喉を細くする」などの目的があると指摘されているので、20世紀初頭の上吟・下吟理論の重要な要素であったと考えられる。

B) 世礼の上吟・下吟理論の中心的な要素は、上半身の動きに伴って声の音高に一時的な上げ・下げが起きることである。世礼のこの不明確であった「指頭半分」理論は、現在の演奏者には認識されていないが、ソノグラム分析では世礼が指摘した上吟・下吟による声の高さの微妙な変化を確認した。

C) また、このように上吟と下吟に伴う一時的な音の上がり・下がりというのは世礼が初めて理論化し、その重要性を指摘したが、仲泊や金武の録音で考察した様に、その現象自体は野村流、安富祖流、両系統における演奏者の音楽で見られ、世礼が指摘した現象は伊差川だけではなく、他の演奏者の声にも既に存在していたことを正確に解釈する方法であったことが明らかになった。上吟・下吟とは、世礼が発案した理論ではなく、永言録や山内の文献にもこれらの用語が存在することからも、19世紀後半、20世紀前半の演奏者の間ではこの理論が周知されていたこ

とが理解できる。世礼の革命的な発見は、身体の動きに伴って、声の旋律における細かい変化が起きることであり、世礼の上吟・下吟理論はこれら音高の上げ・下げを論じている。

D) 上半身の動きが喉の開け閉め、喉頭の動きと関連性がある裏づけとして、伊差川の演奏からは上吟・下吟に伴って声音の倍音に変化があることも確認できた。下直ぐ吟では倍音を多く含む「太い声」に対して、上直ぐ吟の場合に倍音が比較的少ないことが見られた。つまり、上吟・下吟は声音の高さのみならず、声質や声区とも関連していることがわかり、山内や富原の文献で見た発声法についての引用文を解き明かす第一歩だと考える。

E) 曲や演奏者によって多少の差は存在するが、30年代の演奏者の多くの例から、一拍ごとに三線の音と音の間に上吟または下吟のようなアクセントが見られ、これらは比嘉や富原の文献で論じられている「鼠ぬ道小」のことではないかと推測できる。ソノグラムで見られる上吟・下吟の区別は唄われている旋律と深く関係していることが理解できた。

本研究は2015年に国際学会で発表し、さらに国内のジャーナルに提出論文は現在査読中である。

2) 伝統音楽と琉球諸語の研究。本研究では現代沖縄で日常言語として使われなくなってきた琉球諸語は、琉球古典音楽や民謡にどのように保存されているのか、話せない若い世代は伝統音楽とどのように接しているのかを考察した。特に、発音は現代沖縄の音楽世界に関する調査において特に重要なものであり、それは階級および地域のアイデンティティ両方の問題と密接につながっている。話し言葉における発音がかなり急速に変化しうる一方、沖縄および世界中の多くの場所で上演される唄の伝統において見受けられる発音の細かい違いへの高度な注意は、言語の固定性というものが言語に課される過程であり、それゆえ唄の言葉と話し言葉の間に生じる差異の原因でもある。沖縄の話し言葉が伝統歌謡の言語から隔たり続けたように、唄三線において言語の実際の使用法がどのように変化したかは今後の課題である。本研究はGillan 2016として出版された。

3) 組踊の唱えの研究。もう一つの研究成果は沖縄の古典劇である組踊の「唱え」(旋律にのせて唱えるセリフ)における様々な発声法や声の技巧が登場人物をどのように表現しているのか、といった研究である。今までの研究では、組踊では役柄によって唱えが異なっていることが一般的に認識されているが、唱えにおける発声法、細かい旋律の動きや抑揚など、音楽学的な視点からの研究はなかった。本研究では組踊の立方(たちかた)や地謡(ジウテー)とのインタビューを通し

て、その技巧を明らかにし、ジェンダーや琉球王朝時代の階級制度をどのように表彰しているのかを考察した。また、琉球言語との関連性、世界の他の劇での抑揚や声の旋律と比較しながら研究を進めていきたい。これらの研究成果は国際ジャーナルに提出し、現在査読中である。

4) 発声法と集団意識の研究。本研究では発声法は流派、研究所、地域などとはどのような関連性を持っているのかを考察した。琉球古典音楽、民謡、ポップスなどにおける小節、裏声の使用法、曲全体の音高などは、自由ではなく沖縄県内でも地域や個人の特徴として聴衆者に認識されていることを、インタビューを通して明らかにした。また、日本全国の音楽社会において、「沖縄らしさ」を表現している発声法や声の技巧が存在し、これらは日本での沖縄のイメージと密接な関係があることを明らかにした。本研究は2017年、Journal of Interdisciplinary Voice Studies 2/2に掲載される。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

Gillan, Matt, 2017. 'Constructing the Singing Voice - vocal style, aesthetics, and the body in Okinawan Music', Journal of Interdisciplinary Voice Studies 2/2 - Special Issue (Voicing Belonging: Traditional Singing in a Globalized World), pp. tbc.

[学会発表](計 7 件)

Matt Gillan, Constructing the Singing Voice - vocal style, aesthetics, and the body in Okinawan Music ICTM Study Group for the Musics of East Asia, 2016年8月27日, Academia Sinica, Taipei, Taiwan

Matt Gillan, Listening to the voice in Kumiudui - between speech, song and prosody British Forum for Ethnomusicology Annual Conference, 2016年4月15日, University of Kent, Chatham, UK

マット・ギラン, 越境する音楽、芸能、言語、世界に広がる琉球芸能、2016年3月26日、早稲田大学(招待講演)

Matt Gillan, 沖縄の伝統音楽における「声」の伝承と変容、沖縄文化協会、2015年4月27日、沖縄国際大学

Matt Gillan, Visualising Vocal Technique - understanding Okinawan classical vocal terminology through digital analysis 1st International

Forum for Digital Musicology, 2015  
年4月18日～2015年4月19日, 宁波大  
学艺术学院(中国)(招待講演)  
マツト・ギラン、組踊の「声」の概念 -  
唱えと言語・ジェンダー・階級について、  
東洋音楽学会大会、2014年11月23日、  
四天王寺大学  
マツト・ギラン、琉球古典音楽・組踊の  
声の概念、日本文化学科研究公演、2014  
年8月15日、沖縄国際大学(招待講演)

〔図書〕(計 1 件)

Gillan, Matt. 2016. 'Songs, Language  
and Culture: Ryukyuan Languages in the  
Okinawan uta-sanshin tradition', in  
Takao Katsuragi and John C. Maher  
(eds.) Minority Language  
Revitalization - Contemporary  
Approaches, Tokyo: Sangensha,  
pp.340(236-268).

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

ギラン マット(GILLAN, Matthew)  
国際基督教大学・教養学部・上級准教授  
研究者番号: 50468550

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者 なし